

令和5（2023）年6月3日

防災・安全交付金（道路）事業・国補ダム建設（治水ダム）事業（合併）に伴う発掘調査

かわら

川原遺跡 現地説明会資料

（一財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

<調査の概要>

川原遺跡は飯田市下久堅地区の天竜川の左岸の低位段丘上に位置する遺跡です。平成28年度の発掘調査（現在の堤防下）、で縄文時代中期～後期の^{たてあはだてものあと}竪穴建物跡などが、令和4年度の発掘調査で縄文時代後期の^{しゅうせきいこう}集石遺構（SH）、弥生時代後期～古墳時代初頭の^{ほうけいしゅうこうほ}方形周溝墓（SM）、古墳時代中期の^{たてあはだてものあと}竪穴建物跡（SB）、^{ほったてばしらだてものあと}掘立柱建物跡（ST）が確認されました。

これにより川原遺跡は縄文時代中・後期（約5000～3500年前）には集落、弥生時代後期～古墳時代初頭（約1700年前）には墓、古墳時代中期（約1500年前）にはふたたび集落として利用されていたことがわかりました。令和5年度は令和4年度調査部分の下層にあたる縄文時代の調査を行うとともに、北側に範囲を広げてさらに調査を行っていきます。



• 縄文時代後期の遺構

こぶし大から人頭大の川原石が遺跡に持ち込まれて、並べられた跡（SH7）が確認されました。川原石と共に多くの縄文土器や石棒、石錘、石鏃がみついています。



たてあなだてものあと
・古墳時代中期の竪穴建物跡

たてあなだてものあと
古墳時代中期の竪穴建物跡
が4軒みつかっています。それぞれが重ならず並んでおり、向きも一致することから、同時期建っていた可能性が高いと考えられます。

4軒とも四角い建物の北西辺にカマドが造られています。SB3とSB5ではカマドが2カ所に造られています。SB5では南東辺から北西辺に、SB3で北西辺から北東辺への造り替えがあったことがわかりました。

4軒とも床面には炭化した木材が広がっていたことから、火事にあつたか廃絶時に燃やしたものと考えられます。床面から多くの土器が出土していますが、カマドの周辺には特に多くみられません。住居を廃棄する時に意図的に置いたことが想定されます。

くだら
<百済土器の発見>

SB4から須恵質の杯形土器がみつかりました。製作技法や形態が日本国内の土器とは異なり、当時の朝鮮半島にあつた**くだら**という国の土器と共通することから、百済で作られた「**くだら**百済土器」とわかりました。

飯田市内ではこれまでに2点の**くだら**百済土器がみつかり、川原遺跡は3例目になります。古墳時代中期の朝鮮半島との関わりが想定される重要な発見です。



2号竪穴建物跡(SB2)



5号竪穴建物跡(SB5) カマド(西側)



くだら
百済土器



4号竪穴建物跡(SB4)